# 危機を乗り越える智恵と力

湾岸危機の婦女子の保護、その後のイラク人質生活、そしてインドネシアでの反スハルト大暴動の 邦人・華人の保護活動を通して私が学んだこと。(過去から学ばなければ、負の出来事は繰り返し ます。)

### 実践アジア社長塾講師

株式会社オフィスフローラ取締役

山口実

これからするお話は、もう 33 年前と 25 年前の話で古いように聞こえますが、決してそうではありません。今もウクライナやスーダンで、同様の事が起こっていて、これからはそう言った機会が増える恐れがあります。

私が紹介される時、「イラクの人質」の事が大きく取り上げられますが、皆さんの最初の反応は「お気の毒に」とか「大変でしたね。」「生還されて良かったです。」と言うものですが、私は少し違った捉え方をしています。

食べ物も少なく、冤罪の無期拘禁状態で、苦しかったのは事実ですが、苦境に際して自分の役割を理解して最後までベストを尽くし、仲間と一緒に生還したと言う自負があるからです。それが、インドネシアでの反スハルト大暴動の際の邦人・華人の保護に役立ったことは間違いありません。私は、あの美輪明宏さんのおっしゃる「正負の法則」を信じております、それは「調子のよい時は自重し、苦しい時は乗り越えた先に幸せがある」と言う考え方です。

これは、私が問題解決を主な仕事とする総合商社人としての経験から学んだことでもあります。 所謂 Trouble Shooter としての役割を自覚し、苦難にめげず、それらを乗り越えて来ました。

それではこれから、A) 危機から学んだこと B)湾岸危機とイラク人質体験 C)インドネシア反スハルト大暴動 に就いて、順を追ってお話します。

#### A) 危機に際して、学んだこと

- ① より正確な情報の入手に努力し、冷静に状況を分析することが大事重要です。(友人の情報網や他国の国際放送、特に CNN や BBC は大変役に立ちました。)
- ② 騒乱の予兆があれば、避難を含め被害の予防策を立てておくことも大切です。 実は、反スハルト大暴動の後に、自衛隊の幹部数人が私の所に来て、助言を求めました。 私は、陸路、海路、空路またはそのコンビネーションによる在留邦人の退避についてお話ししま した。それは今回のスーダンからの邦人退避に繋がっているものと理解しています。 一方、イラクのクウェート侵攻は想定外で、その場で対応するしかありませんでした。私の経験 不足のせいでもあります。
- ③ 外交官も含めた当事者全員のチームワークで励まし合い困難を乗り越えましょう。

これは、反スハルト大暴動の際には、大変効果的でした。但し、日本の外務省は米国政府の顔を立てるためには、邦人を見捨てることもいとわないことを肝に銘じるべきです。勿論、日本政府が「自己責任」などと詭弁を弄せず日本国民を守ることは当然のことですが、現実はそうではありません。事実イラクの日本人人質は、政府外務省に見捨てられ、日本政府の救出活動は一切行われませんでした。日本外務省の対米追従は、外務事務次官が、在米国日本大使に昇格することからも明らかです。

- ④ 武力ではなく、対話を尽くすことで関係者の信頼関係を構築しましょう。
- ⑤ 苦境を乗り越えるには、プレゼンテーション能力と現場感覚が不可欠です。 湾岸危機の際、日本は米国に約2兆円と言う莫大な資金援助を行いましたが、一部で"Boots on the ground"とか言うアミテージ米国国務副長官の話を聞いて、自衛隊を派遣しなかったことを批判する人々がいましたが、私は「払われたお金は、日本人の血税であり、日本人の血と汗の結晶であること、一般の労働者の過労死は日本しか起きない」ことを繰り返し、主だった外国の方々に説明し、納得頂いています。一方、外務公務員の現場感覚のなさは、目を覆うばかりでした。危機に際して、外務省の事務所や大使館に籠りこもりがちで現場に出ません。また、本省も現地の報告を重視しません。これも本省優位の米国を偏重する外交が生み出した歪みだと考えます。事実、湾岸危機の際も、在イラク日本大使片倉邦夫氏が「外務省が私たちの報告を聴いてくれない」と大変嘆いておられました。\*
- <u>湾岸戦争30年 日本への教訓 田原牧・論説委員が聞く:東京新聞 TOKYO Web (tokyo-np.co.jp)</u> このプレゼンテーション能力と現場感覚は、ビジネスにも欠かせないものです。因みに、プレゼンテーションカの3要素は、論理性と情熱と倫理観です。\*\*
- ⑦ 他者への思いやりが勇気を生みます!自己保身は人を臆病にするだけです。
- ⑧ 政治・経済には哲学や倫理観が不可欠。(詐欺まがいの政治・経済は世界を衰退させます。\*)
- ⑨ ボーダレスな互助共生の精神を発想の根本に据えることです。(対立を煽ることは何の解決も 生みません。)
- ⑩ 騒乱に遭遇した時は、慌てず外には出ないで、窓から離れてより安全な部屋の奥に身を置くことです。(クウェート湾岸危機の際は、アパートの上の階からイラク軍を見下ろしていて、頭の直ぐ上にバズーカ弾を撃ち込まれた商社人もいますし、インドネシアでは 1980 年の暴動の時、流れ石が当たって亡くなった華人や窓ガラスの破片で傷ついた日本人がいました。)また、食糧の備蓄も大切\*です。
- ① 音楽をはじめとするアートを大切にすることも重要です。(人質生活の間、歌や音楽で仲間や自分を励まし、精神的な安定を確保出来ました。また、毎日日記をつけることも力になりました。)
- ② 最後に、海外での一番の危険は交通事故\*であることを肝に銘じて下さい。

### B)湾岸危機とイラク人質体験

いろいろな出来事が繋がっていることを理解するために、少し歴史を紐解きながらお話します。年表を参考にすると状況がより良く理解出来ます。1979年のイラン革命から 2003年に始まったイラク戦争までを辿ります。湾岸危機の経験は、私の 40歳の原点とも言うべき貴重な体験ですので、詳しくお伝えします。

- ① 1979年イランのイスラム原理主義革命勃発
- ② 1979年7月イラクサダム・フセイン大統領の就任(2003年4月まで\*)
- ③ 1980年9月湾岸産油国を守る為に、米英がフセイン大統領をけしかけてイランイラク戦争が 勃発(1988年8月終結)湾岸石油産油国への革命伝播を防ぐのが主な目的でした。
- ④ 1987年12月山口実クウェート三井物産赴任(長引くイラ・イラ戦争に業を煮やして、クウェートの原油を紅海側に運び出すための計画が進んでいました。その F.S.を私が非常に親しい Santa Fe Braun が担っていたいましたので、私の白羽の矢が当たりました。)
- ⑤ 1989年1月パパブッシュが米国大統領に就任
- ⑥ 1990年7月30日に長女が市川市の路上で交通事故に遭う日本に帰国するか迷いましたが 8月4日のブリヂストン本社の部長のクウェート出張の為、待機。待機しました。
- ② 1990 年 8 月 2 日未明湾岸危機勃発イラク軍の精鋭部隊がクウェート侵攻。数時間でクウェートを占領。クウェートの米国から買った最新兵器も傭兵も全く役に立ちませんでした。一方、増長したサダム・フセイン大統領排除を狙った米国がフセイン大統領をけしかけたと言う説もあります。フセイン大統領が狙ったのは、イラ・イラ戦争の莫大な戦費の為のクウェートからの借金の棒引きでした。
- ⑧ 1990年8月4日私が長期滞在していたクウェートのSASホテルにインドからの旅行中にクウェート空港で足止めされ、たらい回しにされた日商岩井の松下さん家族が退避して来ました。 奥さんは7か月の身重で、男の子は1歳でした。
  - 私は、子供のおしめとミルク、そして奥さんの為の櫛などを調達にイラク占領下のスーパーマーケットへ出かけました。「私は日本人だ。」指でピースマークを作りながら、「日本国憲法第九条!」日本国憲法第9条が私の命を助けてくれたと信じている。
  - 一方、同時期にサダム・フセインがクウェート侵攻の理由として「クウェート国民からの要請。」 とか「パレスチナ解放」を唱えだす。これは、後にクウェート在住のパレスチナ人経営者のク ウェート追放と言う悲劇を招いた。
- ⑨ 1990年8月第二週、日本大使館から在留日本人は大使館に籠城するよう指示がありました。 入館と同時に邦人のお母さんたちから、食糧不足の相談ありました。仲良しの子供達から「キン肉マンのおじちゃん、食糧を調達して。」
  - 三井物産もクウェートの友人たちから食糧を調達し、三菱商事も取引先から野菜を集めました。 一方スーパーマーケットに日本食が多量に備蓄されていたことを知っていた私は、戦車のたむ ろする道路を潜りながら、食糧の買い出しに行く。日本食輸入専門業者コスモトレーディングか ら米類も調達。調理班も作って、何とか一日二食を確保。鎌野さん大活躍!! 私は、娘の無事を 祈りながら、食糧集めに奔走しました。数日後アラビア石油の自動車電話ンに「愛ちゃんは無

事退院」との連絡が入り、お母さんたちと一緒に泣きました。

- ⑩ 1990 年 8 月第三週末に、日本の中山太郎外務大臣がイラクを除く中東を訪問し、帰途ストックホルムで「自衛隊の派遣を検討」と発表。第四週には日本大使館がイラク軍に包囲され、食糧身動きが取れなくなりました。
- ① 1990年8月21日、日本の外務省から、イラクへの退避勧告。私は欧米人が人質になったのを聞いていたので、仲間と共に拒否しました。しかし、日本外務省は「イラクに行けば、ヨルダンのアンマン経由で無事帰国できる」と日本企業本社の人事部員を集めて、業務命令を出すよう説得。結局23日24日4班に分かれてバグダッドに移送。私は第4班として航空機でバグダッドに行くが、予定外のホテルに連れて行かれて、即パスポートを取られ、人質になりました。「自衛隊を送ろうとする日本は敵だ。お前たちは人質だ。」
- ② 1990年8月26日には「お願いだから、婦女子は解放してよね。」と言いながら、単身男子は全員戦略拠点へ移送されました。私達日本人15名はユーフラテス川上流の水力発電所ダムに移送され、拘束される。移送中のエアコンの壊れた窓の開かないバスの車内は70℃を超えるような暑さ、飲み水もなく熱中症で本当に死ぬかと思いました。
- ③ 1990年10月中曽根ミッションがイラク訪問人質解放の交渉をし、11月8日に74人が無事帰国。中曽根ミッションは日本政府からの派遣ではなく、スキャンダル事件のみそぎ旅行。私は解放者リストの2番に上がっていましたが、「残りの皆と帰る」と拒否しました。
- ④ 1990年11月中頃、サダム・フセインが土井たか子社会党委員長を招聘したが、社会党国際部長の不手際\*で、土井たか子氏は女を上げ損ないました。
- (5) 1990 年 12 月初めにアントニオ・猪木参議院議員の率いる「イラク平和スポーツの祭典」ミッションが一部人質の家族とイラクを訪問。紆余曲折\*はありましたが、何とか 40 人弱の日本人人質が解放され帰国しました。私は家族を呼びませんでした。猪木氏は湾岸危機中 3 度目のイラク訪問。航空機は JAL や ANA が拒否したので、トルコ航空(プロレス繋がりで、当時のユセフ・トルコ支配人)手配してくれました。\*\*
- ① 1990年12月の第一週に「サダムの枕元に預言者ムハマッドが立ち、「人質を解放せよ」と言ったといううわさが立った直後の7日に「12月9日に人質全員を家族へのクリスマスプレゼントとして、解放」との発表がありました。(因みに、私は友人が没収されそうになったFMラジオを隠し持って、海外からの情報を得ていました。)
- ① 12月9日にバグダッドのマンスール・メリアホテルに移送されました。駐イラク大使は「JAL の特別機を手配しているので、1週間待ってくれと言いました。」私は、「イラク航空でも何でも良いので、まずイラク国外へ!」と直訴しました。そして1990年12月11日朝イラク航空機でバグダッドを発つ予定でしたが、結局出発は午後6時過ぎになり、バンコック経由で12月12日夕方に成田に着きました。私は食糧不足で体重が15kg減り、自慢の筋肉もなくなりへ口へ口でした。帰国直後の成田空港で、ニュースステーション出演の話もありましたお断りしました。一方、私が食糧集めで助けたお母さん達や子供達、そして友人達が迎えに来てくれていて、とても感激しました。
- ® 1990年1月17日湾岸戦争開始(2月28日終了)。空爆の後、イラク軍のさしたる抵抗 もなく Iヶ月強で勝利しました。しかし、米軍は自ら使用した劣化ウラン弾や砂嵐に阻

まれ、バグダッドを占領できず、サダム・フセインも生き延びました。一方、イラク軍の兵站は機能していません\*でした。現在のウクライナ戦争でのロシアの兵站も同様な状況と思われます。兵站(Logistics)は、戦いにおいて最も重要です。一方、兵站は守りも弱く、敵の格好のターゲットになるので、「自衛隊は兵站機能を担うので安全」と言う説明は、正しくありません。湾岸戦争の時、私の国際基督教大学の恩師、緒方貞子先生は国連難民高等弁務官として、多くのクルド人を救ったと後に知りました。実は、クルドの人々は私達人質に食料を分けてくれたので、とても感慨深いです。

⑨ 1993年1月パパブッシュが選挙に敗れ、ビル・クリントン大統領就任。

湾岸戦争でサダム・フセインを排除できなかったのが、パパブッシュの選挙の主な敗因と言われています。一方、米英軍がバグダッドに侵攻出来なかった最大の原因は、「劣化ウラン弾の放射能と砂嵐の影響」と従軍した米兵の方々から直接聞いています。

- 20 2001 年 1 月ブッシュ IR.が大統領就任 (2009 年 1 月まで)
- ② 2001年9月11日NY同時多発テロ勃発(因みに、アフガン侵攻は米国のご都合主義です\*。 対ソ戦争で活躍した人々の排除と思われます。)
- ② 2003 年 3 月 20 日イラク戦争開始 (2011 年 12 月 15 日まで) 謂わば、パパブッシュの復讐戦で、1992 年から計画されていたよう\*です。

米国のイラク戦費は200兆円。日本の自衛隊派遣はブッシュJR.の再選を支援しただけ。 日本の自衛隊はサマワの駐屯地にほぼ籠りきりでした(友人の戦場カメラマンから聴取)。一方、ブッシュ政権が莫大な戦費の回復の為行った経済政策は、世界を経済混乱に導きました。また、ブッシュの外交は皮肉にもイランの保守政権の復活\*を助けました。

私はこのイラク戦争開始前から、イラク戦争反対キャンペーンを展開しました。\*









# C) インドネシア反スハルト大暴動

① 1997年5月アジア通貨危機が起こる

これは、主に新自由主義経済の失敗が招いた混乱です。ドル金融の緩和とその後の行き過ぎた引き締めが招いた悲劇です。この金融資本主義による破綻は、サブプライムローンやリーマンショックと同根です。\*

インドネシアルピーは一夜にして対ドルベースで 1/6 に急落しました。

そのため、私たちも多額の債権を抱えましたが、インドネシア製品の米国向け輸出等で、大部分を回収しました。

② 1998 年 9 月インドネシア大暴動が勃発

湾岸危機の折は日本外交官の協力は得られませんでしたが、私はその反省の下、暴動発生が予想され始めた 1998 年初頭から華僑 VIP を含めた情報網を新任日本総領事と共に構築。 暴動に関する情報を分刻みで入手し、邦人と華人の保護に寄与しました。暴動では華僑が標的になり、外見の似た日本人も襲われる可能性がありました。

- ③ スハルト夫人(イブ 10%と呼ばれた\*)の死後に起きた長女と三男による高額なリベート要求 (20~30%)もこの暴動の主な原因の一つです。
- ④ インドネシアや韓国では IMF 主導で通貨危機克服を試みましたが上手く 行きませんでした。 一方、独自の対策を講じたマハティール首相のマレーシアは 約1年半で回復しました。

このことがきっかけで、私は Dr.マハティールの追いかけになり、その後スマトラ沖大津波支援活動、日本の次世代リーダー養成塾、そして K.L.での山口葵の Dr.マハティールご夫妻主賓のコンサート等を通して、マハティールファミリーとのお付き合いが続いています。アジアではマハティール元首相やシンガポールのリ・クワンユー元首相のように欧米の言いなりにならないリーダーは人気があります。日本では、中国との結びつきの強かった田中角栄元首相や米国との通商交渉に尽力した橋本龍太郎元首相です。















尚、小生の湾岸危機の経験の手記がありますので、ご興味のある方にはお送りします。ご清聴ありがとうございました。

一以上-